

2. 底生生物調査

2.1 調査実施状況

底生生物調査は、底質調査と同時に実施した。

調査結果の概要を表 2-2-1 に、種類数、個体数、湿重量の集計結果を表 2-2-2、図 2-2-1 及び図 2-2-2 に示す。

また、主要種（各季節の平均個体数の上位 5 種）を写真 2-2-1 に示す。

底生生物の調査結果の詳細は巻末の資料編に示した。

2.2 種類数

底生生物の出現種数の季節変化をみると、春季は 54 種、夏季は 61 種、秋季は 36 種、冬季は 54 種であった。

分類群別にみると、各季とも環形動物門が 23～29 種と最も多く、次いで軟体動物門（6～16 種）、節足動物門（6～12 種）であった。

水平分布をみると、四季を通じて沖側の調査地点 St.2、St.3、St.6 で種類数が多く、岸寄りの調査地点 St.1、St.4、St.5 で少なくなる傾向がみられた。

2.3 個体数

底生生物の平均個体数の変化をみると、春季は 317.8 個体/0.15 m²、夏季は 217.5 個体/0.15 m²、秋季は 218.8 個体/0.15 m²、冬季は 157.2 個体/0.15 m²となっていた。

分類群別にみると、四季を通じて環形動物門が多くなっていた。

水平分布をみると、春季は朝明川河口前面の St.4、St.5 が、夏季は St.5 が、秋季は西よりの St.1、St.3 が、冬季は再び St.5 が、多くなる状況であった。

2.4 湿重量

底生生物の平均湿重量の季節変化をみると、春季は 27.28g/0.15 m²、夏季は 20.14g/0.15 m²、秋季は 6.97g/0.15 m²、冬季は 6.84g/0.15 m²となっており、春季・夏季に比べ、秋季・冬季は少ない状況であった。

分類群別にみると、春季・夏季では軟体動物門が、秋季・冬季では環形動物門が多くなっていた。

水平分布をみると、春季及び夏季では概ね沖側の調査地点 St.2、St.3、St.6 に比べて、岸寄りの調査地点 St.1、St.4、St.5 が多くなる状況であった。秋季及び冬季では、明確な傾向は確認できなかった。

なお、春季の St.4 において湿重量が最大の 73.81g/0.15 m²がみられたが、これは軟体動物門-二枚貝綱のアサリ（計 125 個体、計 48.24g/0.15 m²）により、多くなったものである。

2.5 主要種（各季節平均個体数の上位5種）

底生生物の各季における個体数による主要種をみると、春季は環形動物門-多毛綱のカワゴカイ属の構成比率が39.0%と最も高く、次いで軟体動物門-二枚貝綱のアサリ（25.4%）、環形動物門-多毛綱のカタマガリギボシイソメ（9.4%）、同じくヨツバネスピオA型（3.7%）、同じくキョウスチロリ属（1.8%）の順となっていた。

出現状況では、カワゴカイ属はSt.2、St.3を除く4地点で、アサリはSt.3、St.6を除く4地点で多く出現している。

夏季は環形動物門-多毛綱のカワゴカイ属の構成比率が24.3%と最も高く、次いで軟体動物門-二枚貝綱のアサリ（13.9%）、環形動物門-多毛綱のカタマガリギボシイソメ（10.4%）、同じくドロオニスピオ（8.4%）、同じくゴカイ科（7.6%）の順となっていた。

出現状況では、最も多いカワゴカイ属はSt.3を除く5地点で、アサリはSt.3、St.6を除く4地点で多く出現している。

秋季は環形動物門-多毛綱のヤマトスピオの構成比率が26.2%と最も高く、次いで同じくカタマガリギボシイソメ（23.8%）、ヨツバネスピオA型（17.4%）、同じくカワゴカイ属（10.4%）、同じくコアシギボシイソメ（4.0%）の順となっていた。

出現状況では、最も多いヤマトスピオがSt.1でのみ出現しているが、個体数が344個体と多い状況であった。次いでカタマガリギボシイソメについてもSt.3、St.6の2地点のみでの出現であるが、これも個体数が合計で312個体と多い状況であった。

冬季は、環形動物門-多毛綱のドロオニスピオの構成比率が39.9%と最も高く、次いで同じくヨツバネスピオA型（6.2%）、同じくカタマガリギボシイソメ（5.7%）、同じくカワゴカイ属（5.5%）、棘皮動物門-ウニ綱のヨウミヤクカシパン科（4.3%）の順となっていた。

出現状況では、最も多いドロオニスピオはSt.4、St.5の2地点でのみの出現であるが、St.5の出現個体数が364個体と多い状況であった。

表 2-2-1 底生生物調査結果の概要

調査時期		春季	夏季
項目		平成23年6月29日	平成23年8月3日
分類群別 種類数	刺胞動物門	1	1
	紐形動物門	1	1
	軟体動物門	12	16
	環形動物門	29	29
	節足動物門	9	12
	棘皮動物門	2	2
	その他	-	-
	合計	54	61
調査地点別 種類数	最小	8	11
	最大	29	25
調査地点平均 分類群別 個体数 (個体/0.15m ²)	刺胞動物門	0.2	0.2
	紐形動物門	1.5	0.3
	軟体動物門	91.8	51.0
	環形動物門	215.5	156.0
	節足動物門	7.5	8.5
	棘皮動物門	1.3	1.5
	その他	-	-
	合計	317.8	217.5
調査地点別個体数 (個体/0.15m ²)	最小	79	153
	最大	666	357
調査地点平均 分類群別 湿重量 (g/0.15m ²)	刺胞動物門	0.07	0.00
	紐形動物門	0.03	0.01
	軟体動物門	21.69	15.46
	環形動物門	4.95	4.39
	節足動物門	0.25	0.24
	棘皮動物門	0.30	0.04
	その他	-	-
	合計	27.28	20.14
調査地点別湿重量 (g/0.15m ²)	最小	6.01	5.47
	最大	73.81	31.31
主要種 (%)	カゴガイ属 (39.0%)	カゴガイ属 (24.3%)	
	サリ (25.4%)	サリ (13.9%)	
	タカキイメ (9.4%)	タカキイメ (10.4%)	
	ツルシ (3.7%)	ツルシ (8.4%)	
	ヨスズメ (1.8%)	イ (7.6%)	

調査時期		秋季	冬季
項目		平成23年10月11日	平成24年1月10日
分類群別 種類数	刺胞動物門	-	1
	紐形動物門	1	1
	軟体動物門	6	11
	環形動物門	23	29
	節足動物門	6	9
	棘皮動物門	-	3
	その他	-	-
	合計	36	54
調査地点別 種類数	最小	6	11
	最大	17	28
調査地点平均 分類群別 個体数 (個体/0.15m ²)	刺胞動物門	-	0.2
	紐形動物門	1.3	1.0
	軟体動物門	7.7	7.8
	環形動物門	204.5	134.3
	節足動物門	5.3	6.2
	棘皮動物門	-	7.7
	その他	-	-
	合計	218.8	157.2
調査地点別個体数 (個体/0.15m ²)	最小	42	40
	最大	644	418
調査地点平均 分類群別 湿重量 (g/0.15m ²)	刺胞動物門	-	0.00
	紐形動物門	0.05	0.17
	軟体動物門	2.95	2.7
	環形動物門	3.81	3.13
	節足動物門	0.16	0.46
	棘皮動物門	-	0.34
	その他	-	-
	合計	6.97	6.84
調査地点別湿重量 (g/0.15m ²)	最小	0.90	3.53
	最大	18.01	11.9
主要種 (%)	ヤマトシオ (26.2%)	ドロオニシオ (39.9%)	
	タカキイメ (23.8%)	ツルシ (6.2%)	
	ツルシ (17.4%)	タカキイメ (5.7%)	
	ゴイ (10.4%)	ゴイ (5.5%)	
	アシイメ (4.0%)	ウミヤカシ (4.3%)	

注)1. 主要種は平均個体数の上位5種を示す。

2. ()内は総個体数に対する構成比率 (%)を示す。

3. 調査地点平均分類群別個体数及び湿重量の合計は四捨五入の関係で一致しない場合がある。

表 2-2-2(1) 底生生物の種類数・個体数・質重量の集計

《種類数》 単位：種

季節	調査地点	St.1	t.2	t.3	t.4	t.5	t.6	合計
春季	刺胞動物門	-	-	-	-	1	-	1
	紐形動物門	-	1	1	-	1	1	1
	軟体動物門	5	5	2	6	4	2	12
	環形動物門	3	7	22	3	5	23	29
	節足動物門	0	6	2	2	2	1	9
	棘皮動物門	-	-	2	-	1	1	2
	その他	-	-	-	-	-	-	-
合計	8	19	29	11	14	28	54	
夏季	刺胞動物門	-	-	-	-	1	-	1
	紐形動物門	-	-	-	-	-	1	1
	軟体動物門	7	10	3	4	4	4	16
	環形動物門	7	9	13	3	11	17	29
	節足動物門	2	5	4	3	1	2	12
	棘皮動物門	-	1	-	1	1	1	2
	その他	-	-	-	-	-	-	-
合計	16	25	20	11	18	25	61	
秋季	刺胞動物門	-	-	-	-	-	-	-
	紐形動物門	1	-	1	1	1	1	1
	軟体動物門	4	-	1	1	2	1	6
	環形動物門	3	8	13	8	2	9	23
	節足動物門	2	2	2	1	1	4	6
	棘皮動物門	-	-	-	-	-	-	-
	その他	-	-	-	-	-	-	-
合計	10	10	17	11	6	15	36	
冬季	刺胞動物門	-	-	-	-	-	1	1
	紐形動物門	-	1	1	1	-	-	1
	軟体動物門	6	4	1	3	2	4	11
	環形動物門	3	13	21	9	6	15	29
	節足動物門	1	3	5	-	3	3	9
	棘皮動物門	1	1	-	1	1	1	3
	その他	-	-	-	-	-	-	-
合計	11	22	28	14	12	24	54	

注)1. 合計欄は総種類数を示す。
2. 「-」は出現していないことを示す。

表 2-2-2(2) 底生生物の種類数・個体数・質重量の集計

《個体数》 単位：個体/0.15 m²

季節	調査地点	St.1	St.2	t.3	t.4	t.5	t.6	合計	平均
春季	刺胞動物門	-	-	-	-	1	-	1	0.2
	紐形動物門	-	2	2	-	1	4	9	1.5
	軟体動物門	85	25	9	141	289	2	551	91.8
	環形動物門	12	36	214	399	360	272	1293	215.5
	節足動物門	-	16	6	10	12	1	45	7.5
	棘皮動物門	-	-	3	-	3	2	8	1.3
	その他	-	-	-	-	-	-	-	-
合計	97	79	234	550	666	281	1907	317.8	
夏季	刺胞動物門	-	-	-	-	1	-	1	0.2
	紐形動物門	-	-	-	-	-	2	2	0.3
	軟体動物門	145	78	6	46	8	23	306	51.0
	環形動物門	119	69	134	298	152	164	936	156.0
	節足動物門	3	15	13	12	2	6	51	8.5
	棘皮動物門	-	4	-	1	2	2	9	1.5
	その他	-	-	-	-	-	-	-	-
合計	267	166	153	357	165	197	1305	217.5	
秋季	刺胞動物門	-	-	-	-	-	-	-	-
	紐形動物門	3	-	2	1	1	1	8	1.3
	軟体動物門	34	-	1	4	6	1	46	7.7
	環形動物門	383	38	633	61	58	54	1227	204.5
	節足動物門	5	4	8	3	3	9	32	5.3
	棘皮動物門	-	-	-	-	-	-	-	-
	その他	-	-	-	-	-	-	-	-
合計	425	42	644	69	68	65	1313	218.8	
冬季	刺胞動物門	-	-	-	-	-	1	1	0.2
	紐形動物門	-	1	3	2	-	-	6	1.0
	軟体動物門	16	10	1	6	6	8	47	7.8
	環形動物門	5	66	191	46	391	107	806	134.3
	節足動物門	1	11	9	-	10	6	37	6.2
	棘皮動物門	18	4	-	12	11	1	46	7.7
	その他	-	-	-	-	-	-	-	-
合計	40	92	204	66	418	123	943	157.2	

注)1. 合計欄は0.9 m²当たり(全地点の合計)を示す。
2. 「-」は出現していないことを示す。

表 2-2-2(3) 底生生物の種類数・個体数・質量の集計

《湿重量》

単位：g/0.15 m²

季節	調査地点	St.1	St.2	t.3	t.4	t.5	t.6	合計	平均
春季	刺胞動物門	-	-	-	-	0.39	-	0.39	0.07
	紐形動物門	-	0.05	0.05	-	0.03	0.05	0.18	0.03
	軟体動物門	12.07	7.23	0.22	63.06	47.36	0.22	130.16	21.69
	環形動物門	0.09	1.17	5.19	10.60	3.50	9.13	29.68	4.95
	節足動物門	-	1.13	0.08	0.15	0.09	0.03	1.48	0.25
	棘皮動物門	-	-	0.47	-	1.04	0.29	1.80	0.30
	その他	-	-	-	-	-	-	-	-
合計	12.16	9.58	6.01	73.81	52.41	9.72	163.69	27.28	
夏季	刺胞動物門	-	-	-	-	0.02	-	0.02	0.00
	紐形動物門	-	-	-	-	-	0.05	0.05	0.01
	軟体動物門	29.18	25.97	0.25	18.64	18.19	0.53	92.76	15.46
	環形動物門	2.00	3.35	4.76	8.11	1.73	6.41	26.36	4.39
	節足動物門	0.13	0.68	0.46	0.07	0.03	0.04	1.41	0.24
	棘皮動物門	-	0.04	-	0.04	0.09	0.06	0.23	0.04
	その他	-	-	-	-	-	-	-	-
合計	31.31	30.04	5.47	26.86	20.06	7.09	120.83	20.14	
秋季	刺胞動物門	-	-	-	-	-	-	-	-
	紐形動物門	0.05	-	0.05	0.13	0.05	0.02	0.30	0.05
	軟体動物門	15.14	-	0.03	1.03	1.35	0.13	17.68	2.95
	環形動物門	2.72	0.82	14.59	1.79	1.70	1.22	22.84	3.81
	節足動物門	0.10	0.08	0.39	0.01	0.02	0.37	0.97	0.16
	棘皮動物門	-	-	-	-	-	-	-	-
	その他	-	-	-	-	-	-	-	-
合計	18.01	0.90	15.06	2.96	3.12	1.74	41.79	6.97	
冬季	刺胞動物門	-	-	-	-	-	0.01	0.01	0.00
	紐形動物門	-	0.02	0.06	0.95	-	-	1.03	0.17
	軟体動物門	3.84	2.03	1.52	8.25	0.61	0.15	16.40	2.73
	環形動物門	0.04	4.08	7.84	0.73	2.87	3.23	18.79	3.13
	節足動物門	0.01	0.16	2.48	-	0.06	0.06	2.77	0.46
	棘皮動物門	0.79	0.12	0.00	0.57	0.50	0.08	2.06	0.34
	その他	-	-	-	-	-	-	-	-
合計	4.68	6.41	11.90	10.50	4.04	3.53	41.06	6.84	

注)1.合計欄は0.9 m²当たり(全地点の合計)を示す。

2.「-」は出現していないことを示す。

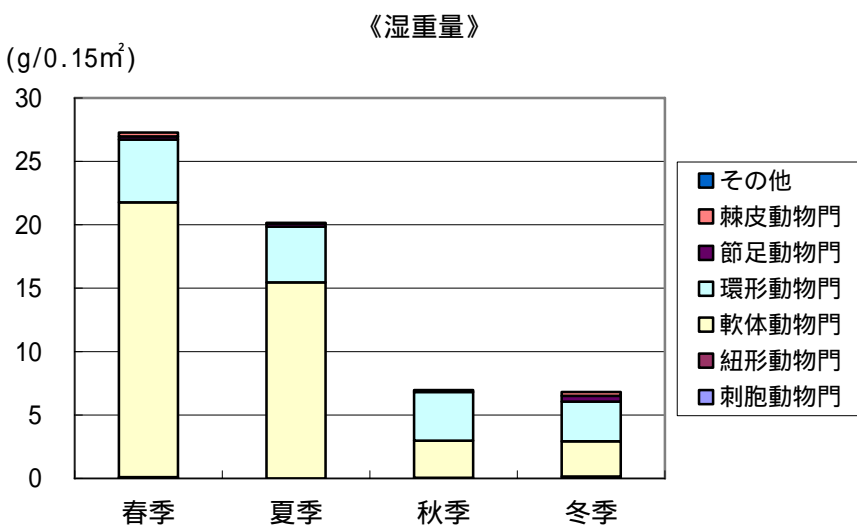
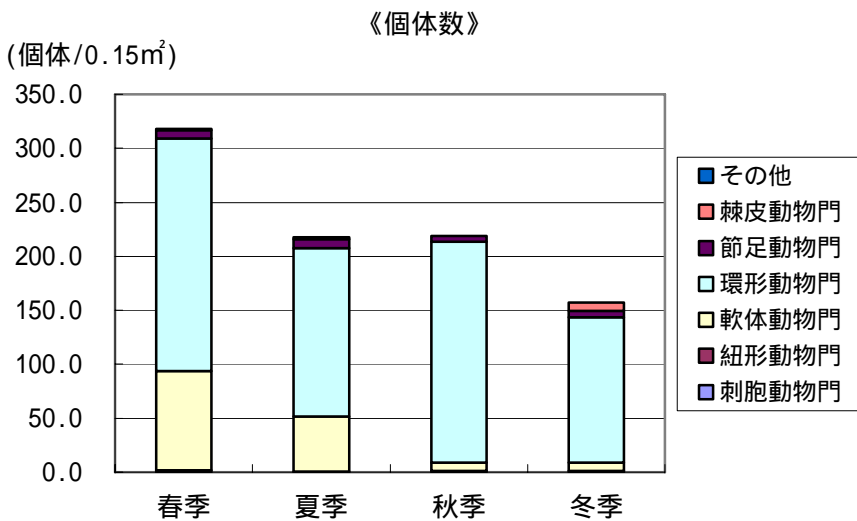
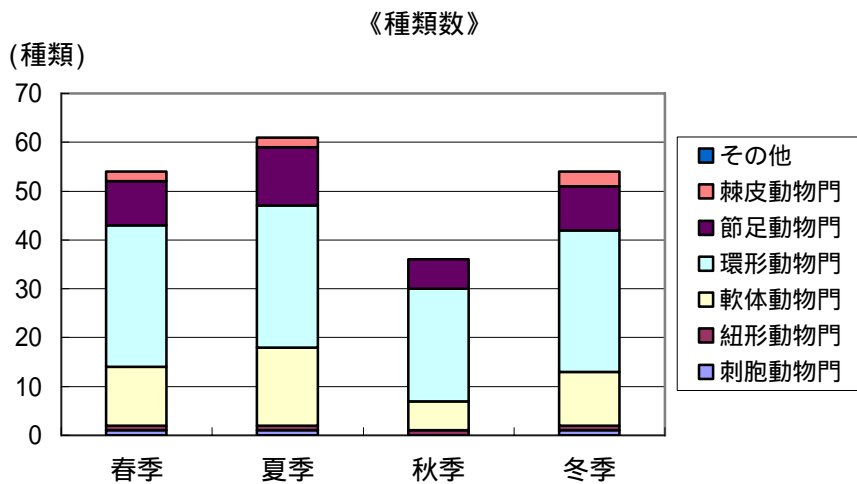


図 2-2-1 底生生物の季節変化

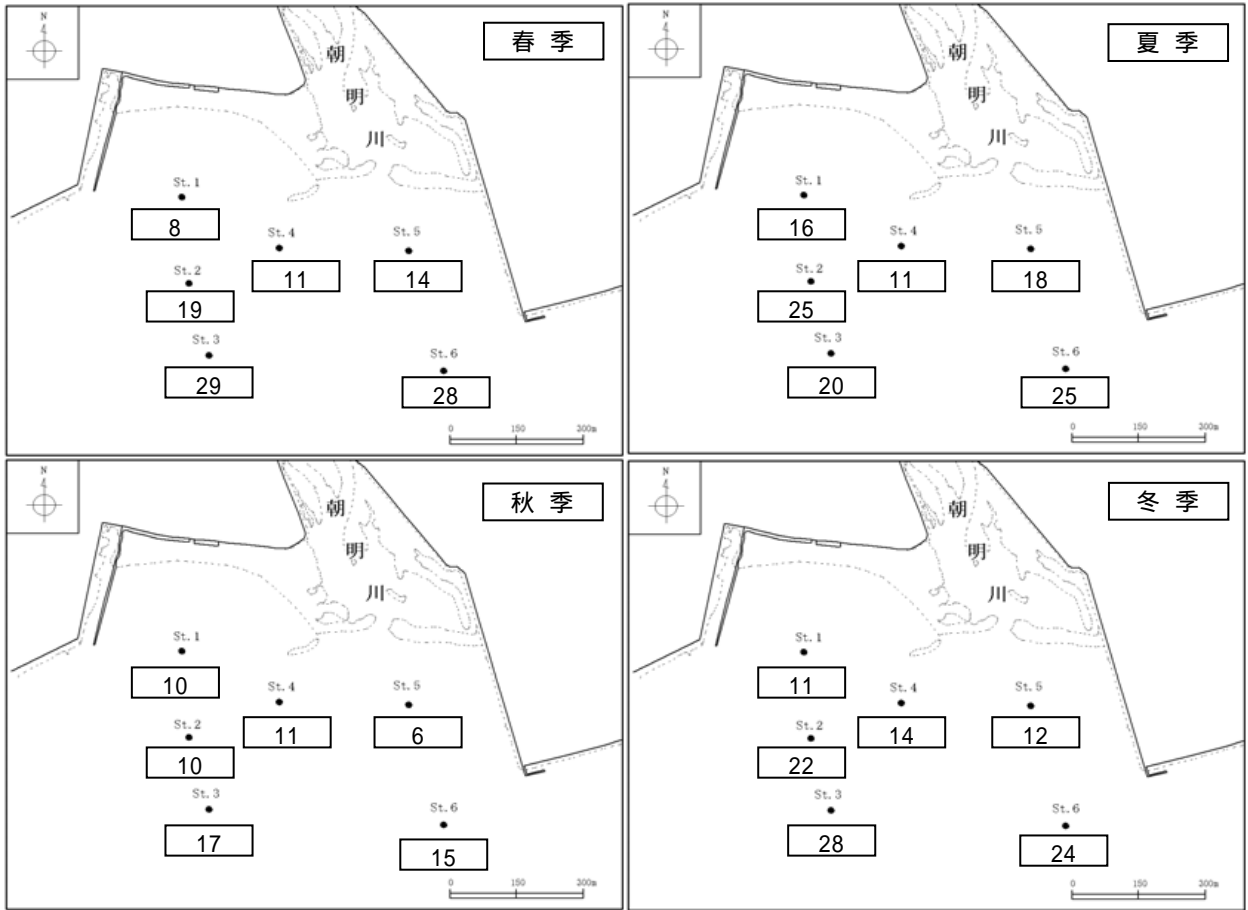


図 2-2-2(1) 底生生物の水平分布 (種類数)

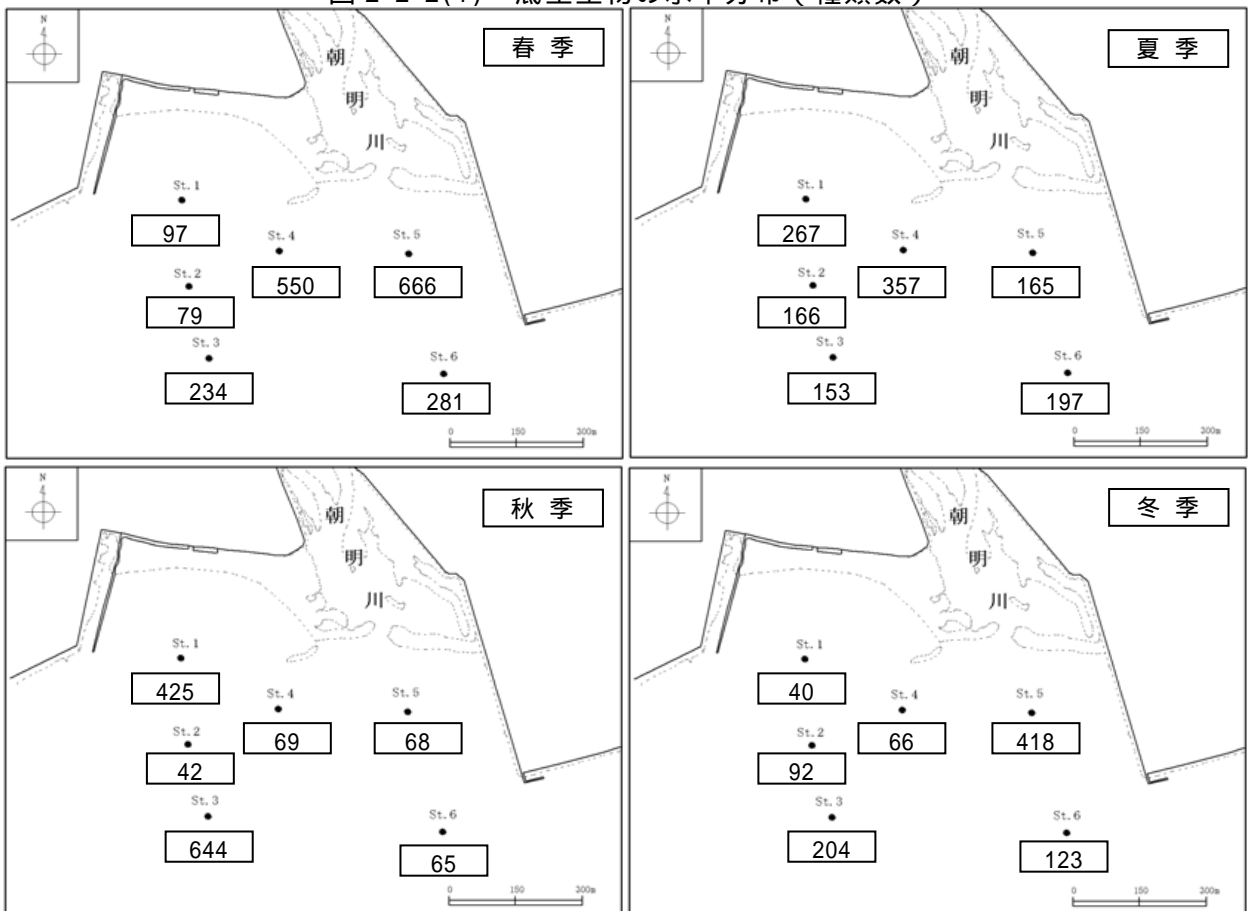


図 2-2-2(2) 底生生物の水平分布 (個体数)



図 2-2-2(3) 底生生物の水平分布 (湿重量)



カワゴカイ属



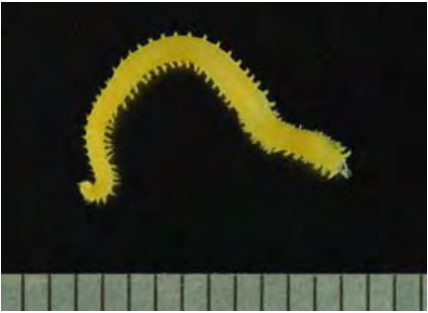
アサリ



カタマガリギボシイソメ



ヨツバネスピオ A 型 (= シノガハネイソメ)



キョウスチロリ属



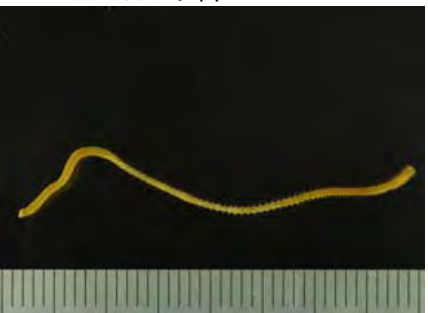
ドロオニスピオ



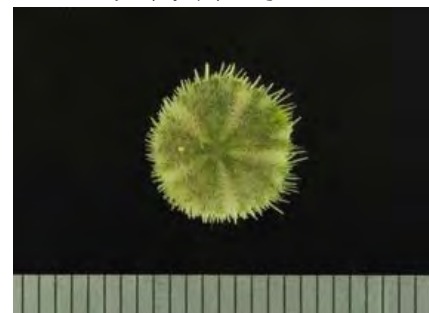
ゴカイ科



ヤマトスピオ



コアシギボシイソメ



ヨウミヤクカシパン科

注：スケールの目盛は 1mm

写真 2-2-1 主要種 (各季平均個体数の上位 5 種)

2.6 重要種

現地調査により確認した底生生物のうち、「三重県レッドデータブック-2005-動物編」(以下、「三重県 RDB」という)に基づき、重要種を抽出すると、オチバガイ、ハマグリが選定された。

また、注意を要する種として、「日本における干潟海岸とそこに生息する底生生物の現状(WWFJ Science Report Vol. 3, 1996)」(以下、「WWF」という)に基づき選定すると、前述の2種に加えてソトオリガイ、トリウミアカイソモドキの4種が確認された。(表2-2-3、写真2-2-2参照)

オチバガイは、春季・秋季では 〃 の3地点、夏季・冬季は 〃 の4地点で確認された。

ハマグリは、春季では 〃 の3地点、夏季は 〃 の3地点、秋季は 〃 の2地点、冬季は 〃 の1地点で確認された。

ソトオリガイは、春季では 〃 の1地点でのみ確認された。

トリウミアカイソモドキは、春季では 〃 の1地点、夏季は 〃 の3地点、冬季は 〃 の3地点で確認された。

表 2-2-3 確認された重要種

	門	綱	種名	種名(和名)	希少種基準		平成23年度			
					三重県DB	WWF	春季	夏季	秋季	冬季
1	軟体動物	二枚貝	<i>sammotaea virescens</i>	ハ	T	険				
2			<i>eretrix lusoria</i>	マ	U	険				
3			<i>aternula marilina</i>	トカ		険				
4	節足動物	軟甲	<i>Acmæopleura toriumii</i>	トリウミアカイソモドキ		危険				
計				4種	2種	4種	4種	3種	2種	3種

注)「三重県レッドデータブック 2005 動物」

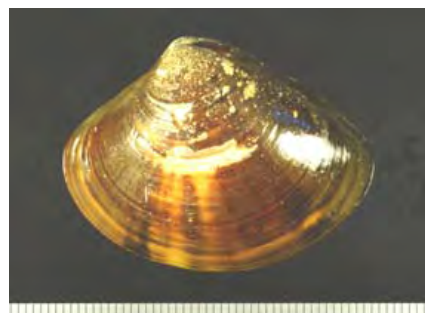
VU: 絶滅危惧 類、NT: 準絶滅危惧

「WWF(WWFJ Science Report Vol. 3, 1996)」

危険: 危険な状態にある種



オチバガイ

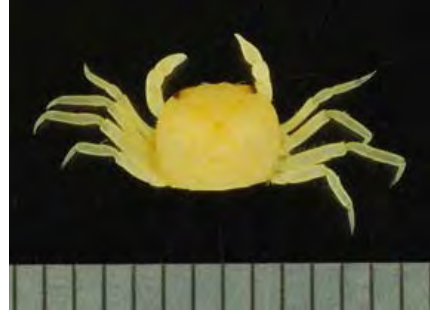


ハマグリ

写真 2-2-2(1) 確認された重要種



ソトオリガイ



トリウミアカイソモドキ

注：スケールの目盛は 1mm

写真 2-2-2(2) 確認された重要種

2.7 底生生物群集の類似性

調査地点間における種類 - 個体数間の類似の程度をみるため、Kimoto の類似度指数 (C^{*}) を計算した。さらにクラスター解析を行うため、Mountford 法 (平均連結法) によって調査地点間の類似度指数を再計算し、デンドログラムを作成し図 2-2-3 に示した。

ここでは、類似度指数が 0.75 以上で結ばれる調査地点の群集を同一とみなし、同一群集の各調査地点の個体数上位 3 種の中で共通して出現した種類によりその群集を表現した。

デンドログラムをみると、春季は調査地点 St.4 と 5 がカワゴカイ属 - アサリ群集、調査地点 St.3 と 6 がカタマガリギボシイソメ - ヨツバネスピオ A 型群集となった。

夏季は、調査地点 St.3 と 6 がカタマガリギボシイソメ - ヨツバネスピオ A 型群集となった。

秋季及び冬季は、各調査地点が独立しており、共通する群集はみられなかった。

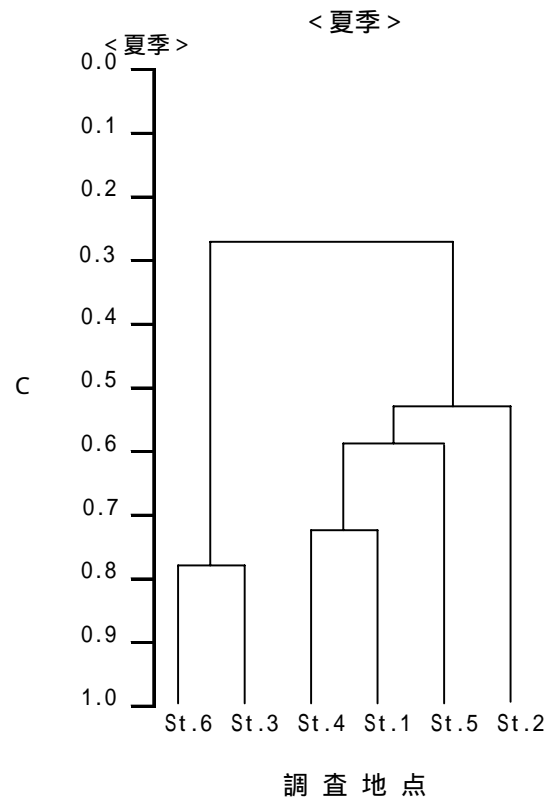
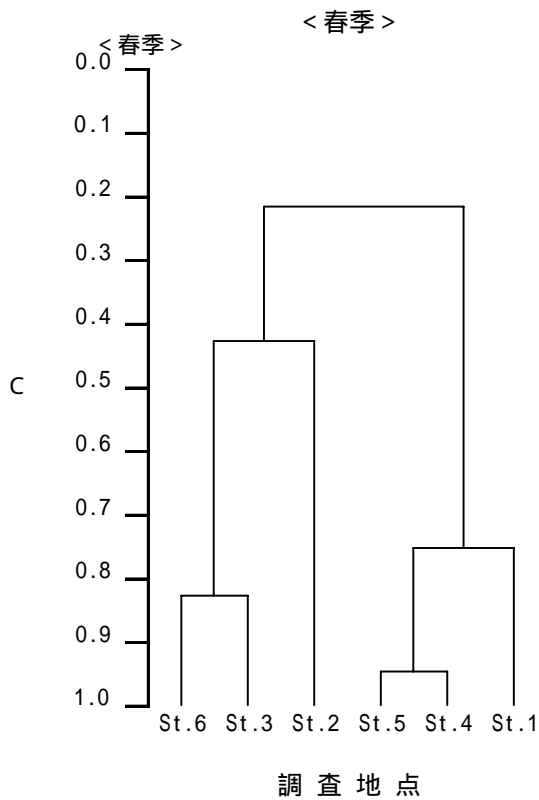
以上のことから、春季及び夏季には調査地点 St.3 と St.6 で共通した生物群集がみられ、両者の類似性が高いものと考えられた。

*) Kimoto の類似度指数 (C) は

$$C = \frac{2 \sum_{i=1}^S n_{1i} \cdot n_{2i}}{(\sum_{i=1}^S n_{1i}^2 + \sum_{i=1}^S n_{2i}^2) N_1 \cdot N_2}$$
$$\sum_{i=1}^S n_{1i}^2 = \frac{\sum_{i=1}^S n_{1i}^2}{N_1^2}, \quad \sum_{i=1}^S n_{2i}^2 = \frac{\sum_{i=1}^S n_{2i}^2}{N_2^2} \quad \text{である。}$$

ここで、 N_1 、 N_2 は調査点 1、2 の総個体数、 n_{1i} 、 n_{2i} は調査点 1、2 の第 i 番目の種類の個体数、 S は総種類数である。

C は 0 から 1 の範囲にあり、両群集の構成が類似しているほど 1 に近く、相違しているほど 0 に近い値を示す。従って、両群集の種類とそれらの個体数が全く同一の場合は $C = 1$ 、両群集に共通する種類が全くない場合は $C = 0$ となる。



< 春季 >

調査地点	St.6	St.5	St.4	St.3	St.2	St.1
St.1						
St.2						0.21
St.3					0.42	0.03
St.4				0.02	0.14	0.61
St.5			0.95	0.05	0.17	0.74
St.6		0.08	0.06	0.83	0.38	0.05

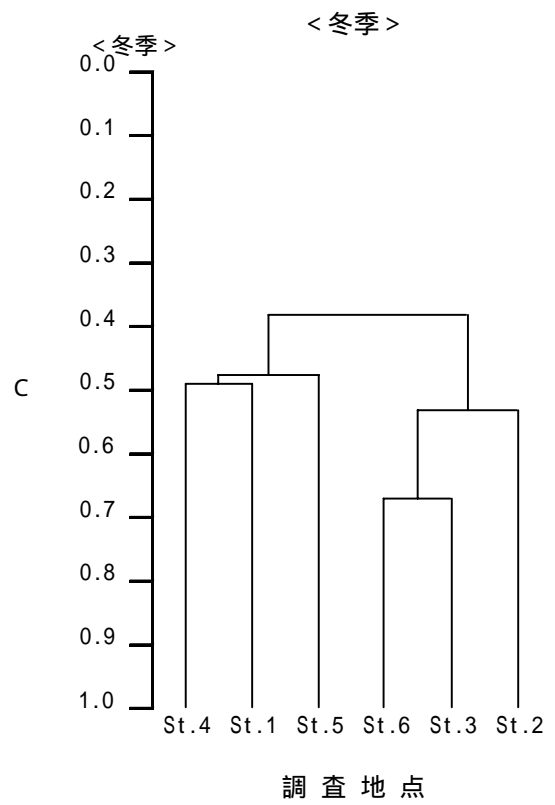
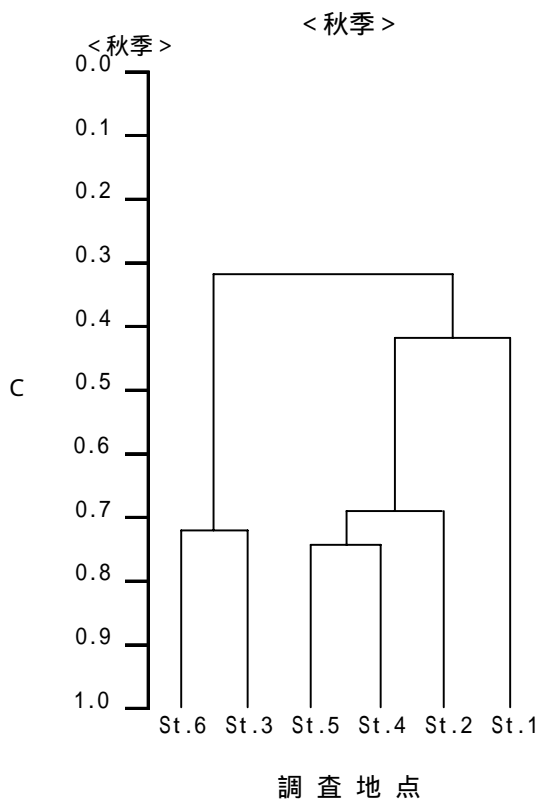
< 夏季 >

調査地点	St.6	St.5	St.4	St.3	St.2	St.1
St.1						
St.2						0.53
St.3					0.20	0.01
St.4				0.00	0.31	0.72
St.5			0.48	0.00	0.31	0.59
St.6		0.04	0.07	0.77	0.27	0.08

凡 例

	0.00	C	0.25
	0.25	C	0.50
	0.50	C	0.75
	0.75	C	

図 2-2-3(1) 底生生物群集のクラスター解析結果 (春季・夏季)



< 秋季 >

調査地点	St.6	St.5	St.4	St.3	St.2	St.1
St.1						
St.2						0.25
St.3					0.15	0.01
St.4				0.06	0.69	0.35
St.5			0.74	0.06	0.53	0.43
St.6		0.10	0.20	0.73	0.33	0.04

< 冬季 >

調査地点	St.6	St.5	St.4	St.3	St.2	St.1
St.1						
St.2						0.11
St.3					0.37	0.08
St.4				0.14	0.38	0.49
St.5			0.48	0.05	0.15	0.24
St.6		0.09	0.22	0.67	0.53	0.06

凡 例			
	0.00	C	0.25
	0.25	C	0.50
	0.50	C	0.75
	0.75	C	

図 2-2-3(2) 底生生物群集のクラスター解析結果 (秋季・冬季)

2.8 底生生物群集の多様性

調査地点における底生生物群集の多様性をみるため、Simpson の単純度指数の不偏推定値 () ** を計算し、表 2-2-4 に示した。なお、単純度指数が 1 に近いほど、単純な生物群集であることを示す。

春季における単純度指数は 0.080 ~ 0.602 の範囲にあり、調査地点 St.1、4 および 5 で高くなっていた。その要因としては、St.1 ではアサリの個体数 (75 個体) が他種よりも多く出現しており、合計個体数 (97 個体) の 77% を占めたことによるものであった。また、調査地点 St.4 および 5 における単純度指数は 0.557 および 0.444 と比較的高い数値であり群集構造は単純であった。その群集組成は、St.4 および 5 の合計個体数 (550 個体および 666 個体) に対しアサリおよびカワゴカイ属がそれぞれ 125 個体 (23%)、391 個体 (71%)、St.5 ではアサリおよびカワゴカイ属がそれぞれ 279 個体 (42%)、345 個体 (52%) であり、この 2 種で全体の 94% を占めている。

夏季における単純度指数は 0.084 ~ 0.430 の範囲にあり、調査地点 St.4 で比較的高くなっていった。その要因としては、カワゴカイ属の個体数 (220 個体) が他種よりも多く出現しており、合計個体数 (357 個体) の 62% を占めたことによるものであった。その他の調査地点での単純度指数は低く、各調査地点で多様性に富んだ底生生物群集となっていた。

秋季における単純度指数は 0.160 ~ 0.682 の範囲にあり、調査地点 St.1 および 5 で特に高くなっていた。その要因としては、St.1 ではヤマトスピオの個体数 (344 個体) が他種よりも多く出現しており、合計個体数 (425 個体) の 81% を占めたことによるものであった。一方、St.5 ではカワゴカイ属の個体数 (56 個体) が他種よりも多く出現しており、合計個体数 (68 個体) の 82% を占めたことによるものであった。

冬季における単純度指数は 0.085 ~ 0.760 の範囲にあり、調査地点 St.5 で特に高くなっていた。その要因としては、St.5 ではドロオニスピオの個体数 (364 個体) が他種よりも多く出現しており、合計個体数 (418 個体) の 87% を占めたことによるものであった。

**) Simpson の単純度指数は

$$\Sigma \pi^2 = \sum_{i=1}^s \left(\frac{n_i}{N} \right)^2 \text{ であり、その不偏推定値は}$$

$$\lambda = \sum_{i=1}^s \frac{n_i (n_i - 1)}{N (N - 1)} \text{ である。}$$

ここで、N は総個体数、S は総種類数、 n_i は第 i 番目の種類の個体数である。

は 0 1 の範囲にあり、多様性に富んでいる複雑な群集では 0 に近く、多様性に乏しく単純な群集では 1 に近い値を示す。但し、次のような特殊な場合が考えられる。

総個体数が 0 か 1 の場合、は計算されない。

総個体数が 2 個体以上でも、総種類数が 1 種類の場合、 = 1

総種類数が 2 種類以上でもその個体数がいずれも 1 個体の場合、 = 0

表 2-2-4 底生生物群集の単純度指数

	St.1	St.2	St.3	St.4	St.5	St.6	最小	最大
春季	0.602	0.080	0.129	0.557	0.444	0.160	0.080	0.602
夏季	0.262	0.084	0.161	0.430	0.201	0.190	0.084	0.430
秋季	0.666	0.160	0.318	0.266	0.682	0.260	0.160	0.682
冬季	0.226	0.085	0.109	0.124	0.760	0.087	0.085	0.760
最小	0.226	0.080	0.109	0.124	0.201	0.087	0.080	-
最大	0.666	0.160	0.318	0.557	0.760	0.260	-	0.760